

ふるさとの林の歌

小川未明

青空文庫

娘は毎日山へゆきました。枯れ枝を集めたり、また木の実を拾ったりしました。

そのうちに、雪が降つて、あたりを真っ白にうずめてしまいました。娘は家の内で親の手助けをして、早く春のくるのを待つたのであります。それは、どんなに待ち遠しいことでありましたでしょう。やがて、物憂い、暗い冬が、北へ、北へと上げていききました。

春になると、雪がだんだん消えてしまいました。野にも、山にも、いろいろな花が咲きました。その季節が過ぎると、山には、こんもりとした緑の葉がしげつて、暖かな心地よい風が岡にもふもとにも吹き渡りました。大空は美しく晴れて、うららかな日の光がみなぎつたのであります。

娘は、朗らかな声で歌をうたいながら、山へ入つてゆきました。春、夏、秋、冬はこうして過ぎました。そして、娘は、だんだん大きくなったのであります。

ある日のこと、娘は、山の林の中へいつものごとく入つてゆきました。すると一羽のかわいらしい小鳥が、いい声で鳴いていました。彼女は、しばらく立ち止まつて、その小鳥の枝に止まつて鳴いているのを見守つていましたが、

「ああ、なんとというかわいらしい小鳥だろう。あの真っ黒な目のきれいなこと、ほんとう

にほんとうにかわいらしいこと。」と、彼女(かのじよ)はいいました。

すると、この言葉(ことば)を聞きつけて、小鳥(ことり)は歌(うた)をやめて、じつと娘(むすめ)の方(ほう)をながめていました。

「どうか私(わたし)をかわいがってください。」と、小鳥(ことり)はいいました。

「私は、兄(きょうだい)弟(だい)も、姉妹(しまい)もないひとりぼっちなのです。毎日(まいにち)、この林(はやし)の中(なか)をさまよって、

ひとり(ひと)でさびしく歌(うた)っています。」と、小鳥(ことり)はつづけていいました。

むすめ
娘(むすめ)は、小鳥(ことり)のいうことを聞(き)くと、

「かわいい小鳥(ことり)さん、私(わたし)は、かわいがつてあげますよ。しかしどうして、そんなにおまえさんの目(め)は、すきとおるように美(うつく)しいんでしょう。」と問(と)いました。

「それは、私(わたし)は、生(う)まれてから、まだ、汚(きた)なものを見(み)たことがないからです。死(し)んだお母(かあ)さんは、私(わたし)に向(む)かつて、けつして、町(まち)の方(ほう)へいつてはならない。もし町(まち)の方(ほう)へ飛(と)んでいつて、そこでいろいろなものを見(み)ると、おまえの目(め)はそのときからにごつてしまう。また光(ひかり)を失(うし)なってしまう。おまえは、この青(あお)々(あ)とした松(まつ)林(ばやし)と清(きよ)い谷(たに)川(がわ)の流(なが)れよりほかに見(み)てはならない。もし、わたしのいうことを守(まも)れば、おまえはいつまでも若(わか)く、美(うつく)しいと申(もう)しました。」

「まあ、おまえさんは、そのお母(かあ)さん(おお)さんの仰(おほ)せを守(まも)っているのですか。」と、娘(むすめ)は小鳥(ことり)を見(み)

つめました。

「さようでございます。私のお友だちは、町の方へ飛んでゆきました。そして、いったぎりで帰つてこないものもあります。また、帰つてきて、しばらくこの林の中に止まつていたものもありますが、長くはしんぼうがしきれずに、ふたたびかなたの空を慕つて飛んでゆきました。こうして出かけていったものも、それきり帰つてきませんでした。」と、小鳥は答えました。

「それで、町を見てきた、お友だちの目の色はにごつていましたか。」と、娘は、熱心にききました。

「それは、私にはわかりません。けれど、たえず、その目の中には、ちらちらとおちつかない影のようなものが漂つていました。そして友だちの話には、町で見た美しかったもの、不思議なもの、また怖ろしかったものが幻に見えてしかたがないといつていましたから、多分、そんなものに心が脅かされているのだろうと思います。」

娘は、じつとそこに立ち止まつて小鳥のいうことをきいて、考えこんでいました。

「ああ、私も、まだ町を見たことがないの。」と、ため息をもらしながら、いいました。「私は、けつして町を見ません、お母さんのいいつけを守つて、この林の中で一生を送る

うと思つています。どうぞひとりぼっちの私をかわいがってください。」と、小鳥は願いました。

娘は、やさしい目つきで小鳥をながめながら、

「ほんとうにおまえの目はかわいい、美しい目だこと。」と、見とれていました。

「どうか私をかわいがってください。そうすれば、私は、あなたになんでもさしあげます。この翼も、この声も、この目もみんなあなたにあげます。どうぞ私をかわいがってください。」と、小鳥はたのみました。

「ほんとうにやさしい小鳥だこと。私は、どんなにおまえさんがかわいいかしれない。私は、なんにもほしくないが、ただおまえさんの目のように美しい目がほしい、そうしたら、私は、どんなに美しくなることでしょう。」と、娘は、うっとりとして心の中で自分の姿を空想に描きながらいいました。

小鳥は、しばらく頭をかしげていましたが、

「私の目も、翼も、また声も、そして大事な命も、みんなあなたのもんです。私は、これから、あなたの胸の中に生きます。」といいました。

「ああ、うれしいこと。」

「私は、もつと、もつと、なんでもあげたいのです。けれど、もうこれよりはほかに持つていません。そして、この林の中には私の命より貴いというほどのものはないようであります。私は、いちばん大事にしていたものをみんなあなたにあげてしまいます。どうか、あなたは、毎日のように、この林の中へきて、私を思い出してください、いつまでも思ひ出してください。そして、いい声でうたつてください。きつとあなたは、いい声が出ます、そして、私の生まれて死んだ、この林を、いつまでも見捨てないでください。そうでしたら私は、どんなに幸福でありましょう。私は、いつまでもあなたの胸の中に生きています。私の小さな赤い心臓は、あなたの心に宿つて呼吸しています。」と、小鳥はいいました。

「もし、そんなことができたなら。」と、娘は、小鳥を輝く瞳で見上げました。

「ほんとうに美しいといつて、おまえの目より美しいものがこの世界にあらうか、なにがいい音色だといつて、おまえの鳴く声より美妙なものがこの世界にあるはずがない。」と、娘はため息をもらしました。

「私はいつまでも、この林の中で、うたつて暮らします。そして、おまえのことを毎日思うでありますよう。」

「どうか、私を永久に愛してください。」

「また、明日、おまえと楽しく話をしましょうね。」と、娘はいいました。

そして、翌日、娘は小鳥と約束をしたように、林の中に入ってゆきました。彼女
は、たまたま立ち止まって耳を傾けました。いつものいい小鳥の鳴き声が耳に聞こえてこ
ないかと思つたからです。けれど、あたりは、まったくしんとしていました。木々のこず
えに当たる風の音が聞こえるばかりでありました。

「どうしたのだろう。」と、娘はいぶかりました。

今日、この林の中でまたあう約束をしたのに、小鳥は、もはや忘れてしまったのだろ
うか。いや、あの鳥にそんなことのあるはずがない。娘は胸の騒ぎを感じました。もし
やと思つて、彼女は、昨日小鳥と話をした木の下に走つてゆきました。するとそこには、
かわいらしい昨日の小鳥が冷たくなつて地の上に落ちているのを見ました。

彼女は、その小鳥の屍を拾い上げて、しっかりと胸に抱きました。

「おまえのいつたことはうそではなかった。みんなほんとうのことであつたのだ。そして、
おまえは、私のために死んでくれた。しかし、今日からはおまえは私の胸の中に生きるで
あろう。それでも私は、ほんとうにさびしくなつた。もう、おまえと話をすることができ

なくなつてしまつた。」といつて、娘は、熱い涙と、息を、冷たくなつた小鳥の屍に吹きかけました。

小鳥のいつたことは、みんなほんとうだったのであります。娘は、だんだん美しくなりました。その目は清らかに黒みを帯んで、その声はますます朗らかに、その髪の毛は、つやつやと輝いたのであります。

彼女は、風の吹く日も、また、日の照る穏やかな日も、山の林の中に入つていつて、さびしく独りでうたつていました。ある日のことです。一羽の見慣れない小鳥が妙な節で木に止まつて歌をうたつていました。娘は、いままでこんな不思議な歌をきいたことがありません。

「おまえのうたつている歌は、なんとという歌なの。」と、彼女は、その見慣れない小鳥に向かつて問いました。

小鳥は、歌をやめて、じつと娘の顔を見ていましたが、

「私は、この歌を町から覚えてきました。」と答えました。

娘は、小鳥の答えを聞くとびつくりいたしました。あのかわいらしい、死んだ小鳥が、母親のいいつけを守つて、一生町を見ずにしまつたことを思い出したからであります。

また、町へいったものは、目の色がにごるといった話を思い出したからであります。

「町って、どんなところなの？」と、娘は、町を怖ろしいところと思いながら聞きました。すると、その紅い羽の混じっている小鳥は、

「それは、このことは、まるでなにもかも違っています。町には美しい家がたくさんあります。また、美しい人間がたくさん歩いていきます。にぎやかな、車や、馬が、いつも往來の上を通っています。そして、そこには、なにもないものはありません。世界じゅうの珍しいものが、みんなそこに集まっています。この林の中にある赤い木の実も、なしの実も、また丘にあるくりも、畑にあるかきの実もないものはありません。私は、それを見ました。そして、まだ町を見ない友だちにそのことを知らしてやろうと思つて帰ってきましたのです。二年前に別れた友だちを探しているのですが、その友だちが見つからないので、いまこの木に止まって、町で覚えてきた歌をうたったのです。」と、その鳥はいいました。

「そんなに、その町というところは、美しいところなの？」と、娘はたずねました。

彼女は、その小鳥の歌が、なんだか自分まで誘惑するような気持ちでしたのです。

「それは、きれいなところですか。一度町を見なければ、この世の中を見たとはいわれません、

ただ、困ったことに、私は、昔、この林でうたった歌の節を忘れてしまいました。よく友だちが歌った、あの歌です。せつかく友だちを呼ぼうと思つて呼ぶことができません。」

と、小鳥は当惑そうにいいました。

娘は、このときじつとその小鳥を見上げていましたが、

「じゃ、私がうたつてあげましょう、この林の歌を忘れるなんて。さあよくおききなさい。

わたしの友だちは、
たにがわ やま、はやし
谷川に、山に、林。

くもうつく
雲は美しいけれど、心が知れず、

ゆきつめ
雪は冷たいけれど、白くて潔し。

よも そら
四方の空に、風騒ぐも、

わたしがこぼしで
私の嘴が出る、声は乱れず。」

娘は、いい声でうたいました。すると、黙つて聞いていましたこずえの小鳥は、

「ああ、その声にきき覚えがあります。忘れていた昔のことがすっかり見えるようです。

ああ、私のこの小さな心臓がふるえる……。」

こういつたかと思うと、木からばかりと落ちてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1921（大正10）年12月

※表題は底本では、「ふるさとの林《はやし》の歌《うた》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ふるさとの林の歌

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>